

発表題目：自己フィードバックと身体の「ズレ」はなぜ生じるのか
—京都大学体育会系少林寺拳法部におけるスマホ撮影を用いた練習をめぐる考察—

所属：京都大学大学院 人間・環境学研究科

氏名： 佐伯灯

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表では京都大学体育会系少林寺拳法部（以下：京大少林寺部）をフィールドとし、部員たちが練習中にスマートフォン（以下：スマホ）での動画撮影等を通して行う自己フィードバックと実践者の身体それ自体との間になぜ「ズレ」が生じるのかを検討する。

発表者は幼少期より少林寺拳法の修練を行ってきたが、そこでは技法習得の指導に口頭アドバイスや、型や技の流れが文字や写真で示されている教本が用いられることがほとんどであった。しかしフィールドワークを行った京大少林寺部では、自身の技をスマホで撮影し、実践直後にその動画を視聴し身体動作を反省していく様子も散見された。この練習方法は自他の身体を客観的な視点から観察可能にする他、実践者自らが持つ動作イメージと実際の動きとの「ズレ」を言語化・分析する「自己フィードバック」を可能にする。しかしその一方で、自己フィードバックを行っても技を再現できない、あるいは技自体の効果（例：投げ技なら相手を「投げる」という効果）が発揮できないなど、フィールド内で「技が身についていない」と見做される場面も多く見られた。こうした事例から発表者は、動きの再現と効果の両方が必要な武道的技の習得において動画等を通した自己フィードバックがどのような役割を果たし、自己フィードバックを行ってもなぜ技が「体得」できないのかを問うに至った。

武道人類学における先行研究では、ブルデューの「ハビトゥス」[ブルデュー2012] 概念やそこから派生したクロスリーの「再帰的身体技法論（RBT 論）」[クロスリー 2012] 等を援用し、技が身につく過程に着目した研究が多い。特に RBT 論は実践者たちが意識的に身体／身体動作に自己フィードバックを行う様子に注目しており、これは技法習得における動画撮影の使用に着目した身体技法研究と重なる。例えば原田と永田は実践者が踊りの習得過程において映像を通じて自己フィードバックを行うことで、初めは「動きの羅列」に過ぎなかった踊りが、動画に映る動きと自身の持つ運動イメージとの「ズレ」を意識的に修正していくことで、「舞踊運動」という一連の流れを持った動作行為へと変化していくことを指摘している [原田・永田 2021]。これらの研究は本フィールドにおける動画を使用した際の有効性と類似する一方で、発表者がフィールドで目撃したのは、こうした自己フィードバックを通して「ズレ」を意識的に理解しながらも身体との「ズレ」を修正できない、あるいは「技が身についていない」という多くの先行研究においてほとんど焦点が当てられて来なかった場面であった。

よって本発表では、参与観察、インフォーマントへの半構造・非構造インタビュー、そして映像記録等を通して、実践者が動画等を用いて行う自己フィードバックが技法習得にどのような役割を果たすのかを、そうした自己フィードバックと身体それ自体との「ズレ」がなぜ生じるのかについて明らかにする。